

グローバルな時代を  
生きるための

# 異文化理解入門

原沢 伊都夫 著



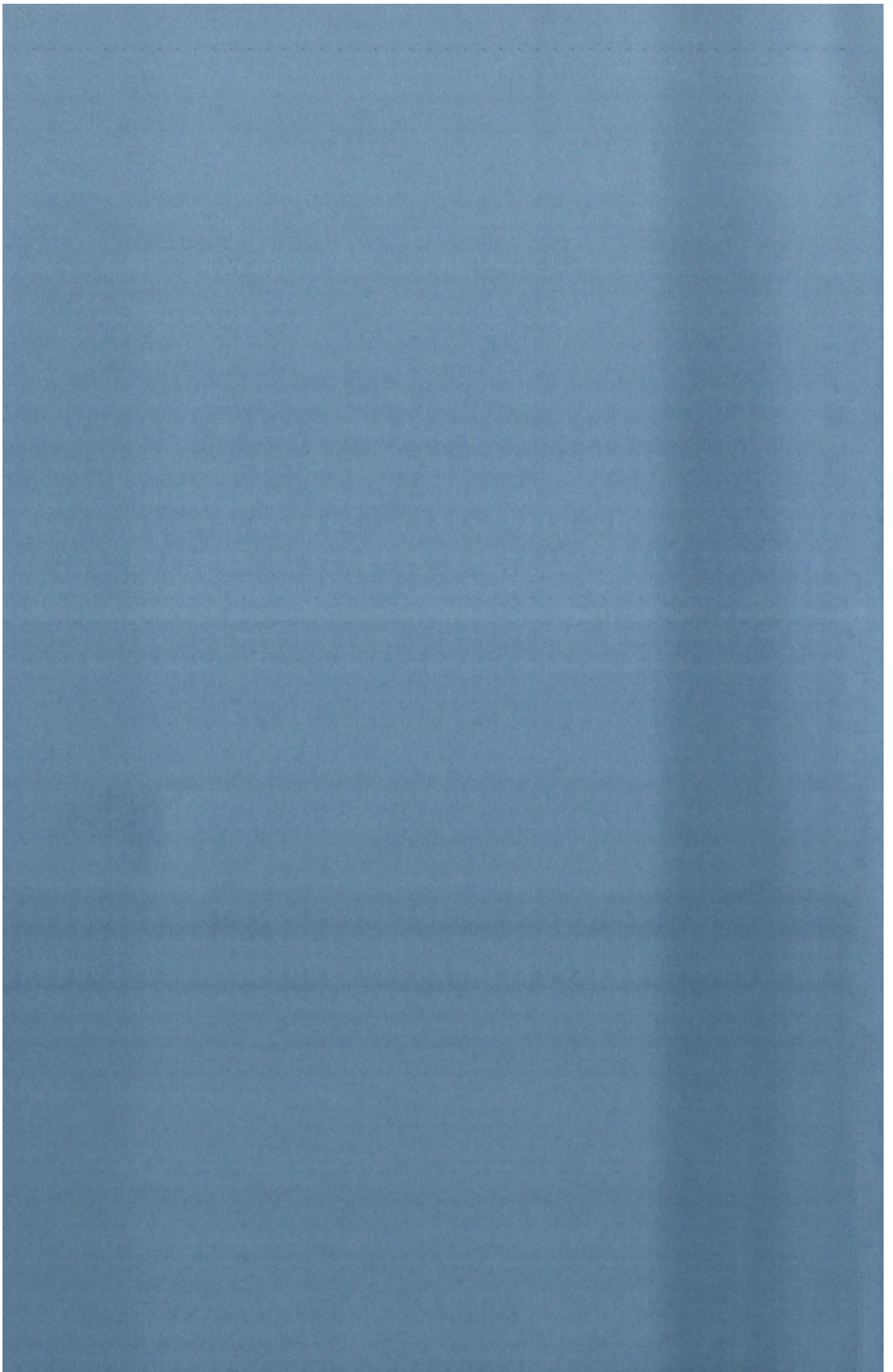
## 国際的人材の育成に!

### 本書の特徴

- 「説明を読む→問題を解く」の流れで、すんなり異文化理解を学べます
- 参加型ワークショップで、授業にも使いやすい全15章構成
- 各章は楽しい「4コマ漫画」で始まり、  
筆者の体験談「異文化よもやま話」で締めくくられています
- 身近な異文化を意識することは、様々な人間関係の向上に役立ちます

研究社





グローバルな時代を  
生きるための

# 異文化理解入門

原沢 伊都夫 著

研究社





# グローバルな人材をめざす



多様化が進む現代社会は、異なる人々との共存関係の上に成り立っています。そのような社会では好むと好まざるとにかかわらず、“異文化”を理解する能力が求められます。しかし、本当の意味での“異文化理解”をいったい何人の人が理解しているでしょうか。本書は、異文化との接し方の基本をわかりやすく説明し、それを実生活に応用するためのものです。本書とともに、異文化との正しい付き合い方を考えていきましょう。



## はじめに

本書は、毎日の生活で異文化を感じ、どのように異文化に対処したらいいのかを考えている人に対し、実践的でわかりやすい方法で異文化コミュニケーションのエッセンスを伝えるものです。これまでも異文化コミュニケーションに関する書籍は数多く出版されていますが、異文化コミュニケーション論の紹介や解説が主な目的であり、その知識をどのように実生活で役立てるのかといった視点で書かれているものはほとんどありませんでした。本書では、異文化コミュニケーションの基礎知識を毎日の生活に活用することで、より実践的で有益な学びを深めていきます。

考えてみると、私たちの周りには異文化があふれています。私たちの生活そのものが異文化コミュニケーションの連続であると捉えることができます。毎日の生活を振り返り、これまでのコミュニケーションを内省することで、新たな視点が生まれ、多くの学びを得ることができます。そこから、本当の意味での異文化理解が始まるのです。

第1章でも触れていますが、異文化コミュニケーションを学ぶためのキーワードが3つあります。それは、「世界の多様化」「自国の多様化」、そして「人間的成長」です。交通手段や通信の飛躍的な発展により、日本と世界との距離は非常に近くなりました。それとともに、日本社会で暮らす人々の多様化も進んできています。日本人だけの価値観で暮らすことはもはや不可能な時代となっているのです。様々な考えや価値観を受け入れ、取り入れることで、国際感覚あふれる人間に成長することが、私たち一人ひとりに求められているのです。日本人、中国人、アメリカ人といった垣根を越えた、マルチカルチャルな価値観を共有することが、これからの世界を生きる人に必要だと言えるでしょう。

このような国際的人材の育成はグローバリゼーションが急速に進む地域や大学、社会において急務の課題です。異文化コミュニケーションの正しい知識を身につけ、多種多様な人々と対等にコミュニケーションが取れる人の存在が多文化共生社会の実現にとって必要不可欠となるからです。本書によって、多くの方が異文化コミュニケーションとは外国人との交流だけではなく、周りの人とのコミュニケーションそのものであることに気づき、自分自身のコミュニ

ケーション能力を高めることで、多文化共生社会をになう中心的人材に成長することを心より願っています。

本書の出版にあたり、研究社編集部吉田尚志さんには企画を進めていただき、また、同じく編集部の濱倉直子さんには休日返上で詳細な箇所まで編集・校正作業をしていただきました。さらに、漫画家のくりきあきこさんは無理な注文にもかかわらず異文化にまつわるすばらしい4コマ漫画を描いてくださいました。この3人の方のご協力がなければ、本書を完成させることができませんでした。心より感謝申し上げます。

いつもながら、多忙な私の心の支えとなっている家族(妻と子供と母)には「ありがとう」という言葉を贈りたいと思います。今回はもう一人(一匹?)、朝晩私を散歩に誘ってくれるリキ(柴犬)にも、感謝の意を表したいと思います。

平成 25 年 5 月 ミカンの花香る函南町の自宅にて

原沢伊都夫



## 本書の使用にあたって

本書は、外国人を含めたすべての人との共生において必要不可欠な異文化コミュニケーションの知識をいかに実践的に役立てるかを考えるものです。一般的なテキストのように、異文化コミュニケーション学の理論やトレーニング方法を学ぶのではなく、これらの知識や理論を現実世界の中に置き換え、実際に活用できるようにすることが本書の目的です。

本書の使用方法は個人で学ぶ場合と大学や社会人講座などでテキストとして使用する場合が考えられます。前者の場合、異文化理解に興味がある、または、個人的に異文化コミュニケーションの知識を深めたいという方が対象となります。自主学習用の書籍として活用していただけたらと思います。後者の場合、(1)大学における異文化関連の一般教養科目や留学生を対象とした「日本事情」科目、(2)多文化共生社会を推進する地域での講習会や勉強会、(3)民間の日本語教師養成機関の異文化理解講座、(4)企業における異文化研修などにおける使用が想定されます。その場合、教師や講師の指示に従いながら、教室の中で異文化コミュニケーションの知識を深めていきます。したがって、社会人、日本人学生、留学生と、どの対象者であっても対応できるような内容となっています。

### 1. 本書で異文化理解を学ぶ方へ

本書は、第1章から第15章までの構成となっています。それぞれの章では、初めに異文化理解に関する基礎知識の紹介があり、「確認チェック」「ワーク」「考えよう」という設問によって、異文化コミュニケーションの理論をどのように実生活に生かすのかを考えていきます。

#### 1) 確認チェック

各章で紹介する異文化コミュニケーションの基礎知識を理解するための設問です。具体的な事例に基づく問題を解くことで、理論を実践的に捉えます。

#### 2) ワーク

各章で扱う内容を体験的に学ぶ活動となります。ドローイング、自己診断、クイズ、ロールプレイ、ブレインストーミングなどの様々な手法で、楽しく本



書の内容が実感できるように工夫しています。

### 3) 考えよう

各章の内容を自分の経験とつなげて考えるセクションです。設問の中でも特に重要な部分となります。みずからの経験を振り返り、考えることで、様々な気づきや学びが生まれます。

これらの設問を補助するものとして、「ヒント」「解説」「考えるポイント」があります。

### 4) ヒント

「ヒント」は、問題を解くにあたり、どのように考えたらいいのか、解答の手掛かりを提示しています。問題が難しいと感じる場合は、こちらを参考にしてください。

### 5) 解説

「解説」では、問題の意味するところを説明したり提示された内容を解説したりしています。また本文の説明も補足しています。

### 6) 考えるポイント

「考えるポイント」では、読者が本書の内容を自分の体験と結びつけて考えられるように、具体的な事例を挙げています。これらの事例を参考に、各章の内容を自分自身のコミュニケーションの中で考える努力をしてください。

これらに加えて、各章の始めは4コマ漫画でその章を導入しています。また、章の最後には、「異文化よもやま話」を掲載し、筆者の異文化体験のエピソードを紹介しています。肩肘張らないで、気楽に本書を楽しんでいただきたいと思います。

## 2. 本書をテキストとして使用する教師の方へ

本書は実用的な学びを目的とする点で、通常のテキストとは異なります。本



書を使って授業や講義を担当する方（本書では教師と呼びます）は、以下の特徴を理解していただくことが重要となります。

### 1) 学習者自身による学び

教師は異文化コミュニケーションの基礎知識を題材として受講者に提供しますが、それをどのように考え、現実的な学びとするかは、受講者自身によって異なります。受講者の経験や考え方、生まれ育った環境などにより、物事の捉え方や認識の仕方が千差万別であるからです。受講者の異なるバックグラウンドによって、教室での学びもまたそれぞれ異なることとなります。したがって、本書では、教師が一方的に知識を与えるのではなく、教師が投げかける題材について、受講者みずからが考え、自己を内省し、気づきを深めていく態度が必要となります。受講者によって学びが異なることから、1つの決まった答えがあるわけではありません。教師は受講者により多くの学びや気づきを促す補佐役であり、決して答えを教える存在ではないことに留意してください。

### 2) ピア・ラーニング (Peer Learning)

学習者による主体的な学びを達成するために、本書の進め方はピア・ラーニングを基本とします。ピア・ラーニングのピアは“peer”（仲間）であり、ラーニングは“learning”（学ぶこと）です。学習者同士の対話を通して、お互いの力を最大限に引き出し、協力しながら学ぶ方法です。本書で紹介される題材について仲間と話し合い、それぞれの経験を共有することで共に学びを深めます。本書で扱う内容は机上の空論ではなく、日常生活と深くかかわりがあることを実感します。そして、自己との対話を通し、内省を深め、自分の考え、ものの見方、さらに言えば、自身の生き方や価値観などを探求していきます。

### 3) グループワーク (参加型学習スタイル)

ピア・ラーニングによる学びを効果的に遂行するために、授業内容は基本的にグループワーク (参加型学習スタイル) となります。このスタイルでは、異なる文化に対する捉え方・接し方についてグループ活動やグループ・ディスカッションを通して学んでいくこととなります。このスタイルの大きな特徴として、教室活動そのものが異文化交流の場となっている点が挙げられます。大学の教